

## マネー（貨幣）について

今回も3年生の大学受験を意識した、少し難しい内容です。

かつて生徒から「高校の現代社会や政治・経済は、中学校の公民の授業の繰り返しでつまらない」と言われたことがあります。確かに中学の公民の参考書を書店で買って読んでみると、高校で扱う内容がかなり説明してあり、特に日本国憲法や政治制度のところは、重なっているなあと思いました。

ただ公民分野の内容は、特に経済の分野は一步踏み込むと、かなり難しい話になり、特に経済ニュースをわかりやすく授業で扱うのは、結構骨の折れることでした。さらに最近は、自分自身ニュースを見みながら、納得のいく解釈ができないことが何度もあって、あと1年半後に定年になって再び教壇に立った時に、果たして生徒から質問されて答えられるか不安になることがあります。

たとえば、

- (1) コロナで商品を買う人が少なくなり、お店も閉まっています世の中不景気だと思うのだけれど、[東京証券取引所の日経平均株価](#)は高い水準を維持している。不景気なら株価は下がるはずだけど？
- (2) コロナ対策で何度も補正予算が組まれて、国の歳出が大きく膨らんでいる。歳入はそんなに増えていないから大量の国債を発行しているけど、国債を買っている人はいるの？
- (3) [ここ15年余りで、アメリカや中国の一人当たりのGDP（国内総生産）が増えているのに、日本はほとんど横ばいで増えていないのはなぜ？](#)

もちろん、(2)のように、それは日本銀行が買い取っているからだと簡単に答えられるものもありますが、そんなに買い取ってインフレにならないの？と聞かれると、すぐには答えられません。

さて、経済分野の学習でアダム・スミスという人は必ず出てきます。「神の見えざる手」によって経済活動は制御されるという市場原理について理論を打ち立てた人です。しかし実際には、資本主義経済は何度も「恐慌」と呼ばれるような危機的な状態になり、特に1930年代の世界大恐慌は有名ですよね。このような事態に対して、神の見えざる手を期待するのではなく、政府が積極的に財政支出（歳出）を増やして、雇用や事業を創出すべきだとしたのがケインズという経済学者です。アメリカのニューディール政策はまさにその典型とされています。

一方で資本主義の経済では所詮景気の大変動や恐慌は避けられないから、企業を国有化して計画的に経済を運営すればいいという社会主義経済のしくみをとる国が、かつてはたくさんありました。[カール・マルクス](#)という経済学者の考え方を採用した経済です。

このマルクスという経済学者は、「資本論」などの著書で知られますが、その日本語訳の本はあまりに難解で、私は何度読んでもよくわかりませんでした。また、マルクスの考え方をもとに、労働者による社会革命をめざす社会主義や共産主義の政治運動が生まれたことから、その経済学説が一般的な（冷静な）評価の対象になったのは、日本では1970年代の後半になってからだと思います。

私はそのころに大学生生活を送ったので、たとえば柄谷行人（からたにこうじん）という評論家の「マルクスその可能性の中心」（講談社文庫）とか、岩井克人という理論経済学者の「ヴェニス商人の資本論」（ちくま学芸文庫）などで、貨幣（マネー）と資本主義について学びました。その後、「ヴェニス商人の資本論」は、高校の国語の教科書に掲載されたり、大学入試問題の題材になったりしたこともあります。

ヴェニス商人の資本論について、少し説明をしましょう。ウィリアム・シェイクスピアというイギリスの作家がいますが、代表作をあげることはできますか？「ハムレット」、「ロミオとジュリエット」、「リア王」などの作品で有名です。日本でいうと安土・桃山時代の頃の人です。「ヴェニス商人」はイタリア人の貿易商やユダヤ人の金貸しなどと、かれらに関係する女性たちが主な登場人物の戯曲（劇を前提にした作品）で、二転三転しながら話が進む喜劇です。ただ、ここではそのストーリーよりも、岩井さんがこの作品を分析しながら、自分の経済学説をわかりやすく説明するところを紹介したいと思います。

まずは遠隔地と貿易をすると、なぜ儲かる（利潤が生まれる）のでしょうか？それは、同一のモノでも、人々の価値体系が違えばその価値に差異が生じるので、その差異が利潤になるのです。たとえば、東南アジアではコショウは日常的な香辛料ですが、当時のヨーロッパでは肉の保存のためには、金と同量で交換しても欲しいほどの高価なものでした。

また、貨幣はそのまま保管していても増えませんが、利子をつけて貸したり、儲かりそうな事業をしている会社の株を買ったりすることで、「資本」となり利潤を生んでいきます。貨幣の本来の機能は、交換価値の表示つまりモノの「値段」を示して、実際に交換の仲立ちとして人々を行き来するというものです。しかし、ひとたび流通を始めると、その本来の機能を越えて、自らを増殖させる力を内蔵しているのです。

さきほど遠く離れた場所の間での価値体系の差異（空間的な差）から利潤を得る貿易の話をしてきましたが、産業革命以降の時代には、時間的な価値体系の差異を利用して、具体的には未来の価値体系を先取りして現在の価値体系との差異から利潤を導くということが一般的になります。つまり技術革新（イノベーション）によって周囲より早く未来の価値体系を開発してそれを示し、その中で価値がある商品が高く売って利潤を得るといった仕組みです。ICTの分野を筆頭に、未来の価値体系をつくるための激しい主導権争いが、世界の企業の間で行われていますよね。岩井さんの経済学説はざっとこんな感じです。

最後になりますが、むかし授業でよく使っていたネタの話をしてします。

「1万円札はいくらでつくれるのか知っていますか？」

「答えは21円ですが、21円でできるものが、どうして1万円になるのでしょうか？」

ちなみに、この21円というのは、私が大蔵省（今の財務省）[印刷局](#)の資料などで調べた当時の値段です。今どのくらいのコストで作られているのかはわかりませんでした。

さて、当時の生徒たちの答えは、「政府が保証しているから」とか、「中央銀行である日本銀行しか発行できない券だから」とか、「今までまんまとだまされてきた」とかいろいろありました。兌換（だかん）紙幣とか不換紙幣とか、金本位制とか銀本位制とかをそこから説明すると、割とすっと理解できる生徒が多かったように思います。いうまでもなく現在の日本銀行券は不換紙幣ですよね。日本橋の日本銀行本店の[貨幣博物館](#)に行くと、そのあたりのことも含めて、いろいろ貨幣について勉強できると思います。

\*フォントが青色になっているところにはハイパーリンクが貼ってあります。